

徳富蘇峰記念館

目録 (9)

「明治・百家書簡展」

展示期間◇平成三年一月七日～十二月二十日

展示に際し、つぎの三つの柱をたてました。

一、政治家の書簡

二、文化人の書簡

三、明治二十一年九月に発会した「文学会」関係の書簡

明治二十三年、日本の最初の議会開設のとき、蘇峰は二十八歳でした。

平民主義を唱えていた蘇峰は、憲法発布、国会開設に、「ああ、千載の一時」と歎びました。明治十八年、第一次伊藤内閣から、明治四十四年の第二次西園寺内閣までに、十四の内閣が誕生し、伊藤博文・黒田清隆・山県有朋・松方正義・大隈重信・桂太郎・西園寺公望と、七人の総理大臣が誕生しています。総理から蘇峰への書簡は、黒田清隆以外の六人からのものがあります。それらは、挨拶程度のものでなく、深い人間的な交流を感じさせるものです。第一次伊藤内閣の外務大臣井上馨、陸軍大臣大山巖、第一次山県内閣の外務大臣青木周蔵、第四次伊藤内閣の外務大臣加藤高明、内務大臣末松謙澄、第一次桂内閣の陸軍大臣寺内正毅、司法大臣清浦奎吾、第二次西園寺内閣の農商務大臣の牧野伸顕等の書簡も展示します。

大隈重信は明治二十二年十月、閣議の帰途を玄洋社員に襲われ負傷しましたが、それから八年後、次のような招待状(印刷・カード)を出しています。「拜啓 来ル十八日ハ小生遭難第八周年ニ相当致シ、聊カ追懐ノ為メ、園遊会相催候間、同日午後三時、早稲田私邸へ御来臨奉希望候。敬具 三

十年十月十三日 大隈重信 徳富猪一郎殿。このようなユーモアと余裕のある文面は、さすがに明治の政治家らしいと思います。大隈家の食事の美味しさは有名であったようで、当時、料理ブックを書いた村井弦齋はその本のなかに、大隈家の台所を紹介しています。矢野龍溪は大隈のところへ食客として長いこと滞在したのも、食事にあつたのかもしれない。食通の森田思軒も大隈家の食事を好んだといっています。明治三十年十月、大隈がこの招待状を送ったとき、大隈の身辺が平和であったとは思えません。世にいう松隈内閣の内部での抗争は激しく、これより三ヵ月後に第三次伊藤内閣が成立します。

明治二十二年、自由民権運動家植木枝盛の『東洋之婦女』が、出版人佐々城豊寿の名で世に出ました。この出版までの経緯に蘇峰が関係しながら助力できなかったことは、当館の書簡で詳しくわかります。豊寿は蘇峰の伯母矢島梅子とともに明治十九年の暮、東京婦人矯風会を創立し、明治二十一年には『東京婦人矯風雑誌』を創刊した女性です。婦人の家庭内労働を評価し、婦人の財産権を主張して多くの非難を受けました。内村鑑三は「非理想的婦人の一人」とまで言いました。これにもめげず矯風会内部に政治活動の母体ともなる婦人白標俱樂部を、潮田千勢子とともに作り、「婦人の議会傍聴の禁止」等に抗議しました。当館には、「男女親友親睦会」を開き、蘇峰と植木を招いている書簡があります。社会的に先覚女性として活躍していた豊寿ですが、娘信子と国木田独歩との恋愛・結婚・離婚についての母親の苦悩を蘇峰に綿々と綴っている書簡もあります。これによって独歩の『欺かざるの記』が一部欺むていたことが分ります。

蘇峰は明治二十一年「文学会」を主催し、明治の文壇の黎明期に、新旧両文学者の交流の場を作りました。旧いものを大切に、新しいものを積極的に吸収した、志を抱いた人々の交際を示す書簡や書、絵画を展示することによって、明治の時代の息吹をお伝えできれば幸いです。

各々の展示書簡については、表にして後に示すことにとどめ、今回の目録は、軸ものの解説と、三の「文学会」についての紹介に重点をおきました。

平成三年 一月

財団法人 徳富蘇峰記念塩崎財団

蘇峰は一生のなかで多くの人に感化を受けたといえます。

なかでも、横井小楠・勝海舟・新島襄・父一敬(淇水)を四恩と称し、四恩堂を建てて記念したいと述べています。開化思想家の小楠が京都で暗殺されたとき、蘇峰は七歳でしたのでその感化は、小楠の弟子であった父からの間接的のものであつたろうと思われれます。新島には明治九年の末から二十三年までの十二年間、親しく教えを受けました。父親が大正三年、九十三歳で死去したとき、蘇峰は五十二歳でした。近世日本国民史」を書きはじめた時でしたが、修史に着手することを大正七年まで中断しています。小楠からは時の流れに則した客観的な物の考え方を、新島からは「大人とならんと欲すれば、大人と思うなかれ」と言う謙虚な無限の愛を、海舟からは活きた世間を処して行く「人間学」を、淇水からは絶対的信頼の強さを学びました。

横井小楠(一八〇九—一八六九 文化六〇(明治二年))

江戸時代末期の洋学者、政治家、思想家、肥後熊本藩の藩士。海外の事情に明るく、兵制武器の研究を行った。維新後新政府に参与。その開化思想は保守派のきらう所となり、京都で暗殺された。

*揮毫紙本軸装 100cm×27cm 176cm×37cm

人心惟危。道心惟微。惟精惟一。允執厥中。

詩意 現今人心は安定を欠き、道徳心も薄れているが、人間として大切なことは中庸を守るといふことだけである。

勝海舟(一八三三—一八九九 文政六〇(明治三十二年))

江戸時代末期、明治時代初期の政治家。江戸の旗本の家に生れた。一八六〇年遣米使節となり感臨丸の艦長として、日本人の手で最初の太平洋横断をした。王政復古後政府の東征軍に対して旧幕府軍を恭順にみちびき、西郷隆盛と協定して、江戸城を無血の状態で明けわたした。

*絹本軸装 132cm×43cm 203cm×58cm

年々億萬慮。總是盲想。於下其言。以精神措其足心。是氣血循環之清涼法也。辛卯晚秋 海舟禪師

明治二十四年二十九歳の蘇峰が大病に罹った時、六十九歳の勝先生が「よしよし俺が治してやる。それは当人が若気の至りであり国事を憂へ、余計な心配をするからである。それでその頭の熱を足の踵まで引下ぐればきつと治るに相違ない。また邪気を払ふにはこれに限る」と一包の硫黄と共にこの幅を与えた。

新島襄(一八四三—一八九〇 天保十四(明治二十三年))

明治時代の教育家、宗教家、安中藩士の子。同志社の創立者。キリスト教主義の学校を開いて、子弟に強い影響を与えた。

*紙本軸装 105cm×43cm 191cm×52cm

真理似寒梅。敢侵風雪開 新島襄。

この書の下に「蘇峰新島先生の書に題す」として次のようにある。蘇峰は塩崎彦市の号。

真理似寒梅 敢侵風雪開。人生精進業。渾自克艱來。前二句新島先生愛誦焉。海内当有幾許類本也。今夜靜峰詞友需加後半二句作五絶、未知得先生之意与否、但知詭詔之譏不能免耳、昭和丙戌三月念三 頑蘇八十四

山県有朋(一八三九—一九二二 天保九(大正十一年))

明治時代の軍人、政治家、長州藩士。吉田松陰の松下村塾に学び勤王の志を固くした。ヨーロッパ諸国の兵制を視察、徴兵令制定に関係して、陸軍卿に任ぜられた。伊藤博文没後は元老となり、政界に大きな力を誇った。

*色紙軸装 130cm×31cm 191cm×43.5cm

肥後の国にて戦ひたるとき 有朋

木留山しらむ砦のすてか、り けふるとみしはさくらなりけり

この歌は木留陣中の諷詠として、「公爵山県有朋伝」(中巻 昭和八年発行、編述者徳富猪一郎 発行所 山県有朋公記念事業会)に次のように説明されている。有朋が「世間では、予が北越戦闘に出征した当時の述懐である「あたまもる」の歌をば、左も予の会心の作であるかのやうに伝へ

ているが、自分としては、決してさうでは無い。寧ろ西南戦役のときに詠んだ「木留山」の歌の方が、実際の心境に触れた歌だ。何等彫琢を仮らずに、自然に出来た会心の作であるかも知れぬ」と。

蘇峰賛。山県元師自称一介武弁。蓋謙辞也。公思慮綿密。胸中無限機畧存。而其堅忍不撓之精神与百敗不屈之胆氣。深藏潛蓋。天下知之者鮮矣。是国歌一首。明治十年西征役田原坂陣中所詠。曾所賜予。予今老矣。仍贈靜峯賢契。併記其事由。蘇叟九十一

橋本雅邦（一八三五—一九〇八 文政六—明治四十一年）

川越藩の絵師の子。狩野勝川に学ぶ。岡倉天心らとともに日本画革新の運動を推進した。東京美術学校教授。

*四季山水画 31.5cm×50.5cm 四幅 墨画。

*添状 秀邦 32cm×84cm

四季山水は昭和十八年蘇峰の手簡、秀邦の添状と共に塩崎彦市に贈呈された。

この絵は、川上操六と岡倉天心、橋本雅邦、蘇峰の四人が展覧会の帰りに昼食をともにしたことから生まれたこと、この絵を蘇峰が大変愛好していたこと、病気の看護の礼に塩崎に贈るといことが、蘇峰の添え状として巻物になっている。その一部を紹介する。

橋本翁雅邦ハ明治ノ巨匠ニシテ皇国近世畫家の泰斗也。其畫古今東西ノ神髓ヲ折衷シテ自ラ一家ヲ作ス。予往年東台繪畫展覧會ニ赴（ケ）リ、偶々親友川上參謀總長在焉、乃チ相與橋本雅邦岡倉天心諸君ト總長ニ誘ハレテ午餐ヲ偕ニス。興趣如湧、總長從容予ニ誇テ曰ク、此ニ北京矢野公使ヨリ乾陸佳帛（紙）ヲ獲タリ、希クハ橋本翁ノ揮洒ヲ乞フテ、之ヲ君ニ呈セント、翁首肯ス。幾モナク總長婦幽、事遂ニ熄ム。予乃翁ヲ訪フテ曰ク、總長（ノ）言、耳尚熟ス、敢テ翁ヲ煩ストコロアラン、但シ佳紙ナキヲ憾ムル耳ト。翁欣然トシテ曰ク、吾ニ越前新製ノ雅邦紙アリ、之ヲ以テ君ノ望ニ應セント。此ニ於テ予曰ク、畫題ハ四季山水、而シテ惜墨如黃金、愛筆如白金ヲ是望ムト。翁復欣然快諾ス。予翁ノ作ヲ得ルヤ珍（珍）重惜カス、日夕青山艸堂ノ樓上ニ遍（遍）額トシテ相欣賞ス。偶々児万熊曰ク、遍（遍）額ハ名畫ヲ永久ニ護持スル所以ニアラス、請フ之ヲ

條幅トセント。仍リテ其ノ言ノ如ク改装シ、之ヲ成實堂ニ藏スル有年。

於茲、去年春夏ノ交、予罹疾、荏再（再）不癒、塩崎君彦市勞ヲ忘レ、苦ヲ忘レ、費ヲ忘レ、遂ニ吾ヲ忘レ、周旋奔走、漸ク小康ヲ得ルニ至レリ。予一物ノ以テ君ニ報ユルナシ。是ヲ以テ家妻ト胥譏シ、不腆ノ什ヲ拳ケテ之ヲ贈ル。餘情紙外ニ在リ、君看取セヨト云爾。昭和癸未九月吉、老蘇八十一

高島北海（一八五〇—一九三二 嘉永三—昭和六年）

フランス人の地質技師にフランス語と地質学を学ぶ。一八八四年イギリスのエジンバラで開かれた万国森林博覧會に出張し、ひき続きイギリス各地、ヨーロッパを歴訪。そのままどまらず、四年間フランスのナンシー森林高等学校に留学。九十九年フランスの文部省から教育功勞勲章をうけた。地質学者、森林学者の眼で対象をみつめ、独自の画風を展開したといわれる。アール・ヌーボーに影響をあたえ、ナンシーの美術館はじめ、フランス各地に多数の絵が所蔵されている。

*絹本軸装 29cm×31cm 60cm×122cm

高島北海筆風景六幅

- 一、瑞仏界ローヌ河上の炮台
 - 一、仏国ナンシー付近の平野
 - 一、北米カスケード山中の急流
 - 一、伊国アマリーマリナ
 - 一、北米落機（ロッキー）山連峰
 - 一、北米落機（ロッキー）山中河の一部分
- これは初展示。箱書きに次のようにある。「是往年予訪北海高島君從其写生帳摘出請其洒揮而得焉 尔来珍襲清玩多時今割愛奉是春秋園主人聊是微志伝尔、蘇與八十八 画中賛仏頭塗泥為主人請要不得正填白 蘇與又誌」春秋主人とは塩崎彦市のこと。一幅のなかに、今年の干支の羊が小さく牧場で草を食んでいる姿がある。

平福百穂（一八七七—一九三三 明治十—昭和八年）

平福百穂は、秋田の画家穂庵の子として生れ、東京美術学校を卒業後、文展・帝展にも参加し、古典的傾向に走りつつあった当時の日本画に、新

生面を開拓した第一人者と言われる。晩年は南宗画ふうの淡彩色を描いたほか、アララギ派の歌人でもあった。蘇峰も佐々木信綱の弟子として歌人であり、百穂と親交が深かった。百穂は初期民友社社員。「国民新聞」を読みやすい新聞にするために、百穂のスケッチ画が多く掲載されている。国会の演説、乱闘の様子など、現在テレビで見るとような状況を描いている。又蘇峰の本の装丁の多くを百穂の絵が飾っている。

*「牛」紙本軸装 68cm×117cm 墨画

明治孟春青龍山に於て百穂寫。

蘇峰賛 進歩難し兮、進歩遅し、遂に退かず、遂に息まず、千里を問はず更に萬里、能く極南より極北に達す。蘇叟題。

「文学会」の開催状況と参加した人々

高野 静子

明治二十一年九月に、徳富蘇峰、森田思軒、朝比奈知泉の主唱によって発会した「文学会」については、それに関する資料が乏しかったために、今迄明らかにされていることが少い。「文学会」は明治二十年代初頭に生まれた、明治文壇の最先端に位置する文筆家の集りである。明治二十年代の文化が総合的に見直される時に、「文学会」の存在した意義は、必ず正しく評価されるであろう。

「文学会」は毎月第二土曜日に開かれ、少数気鋭の文筆家たちが、酒なしで夕食を共にし、食後一人か二人が口演し、その後雑談するという会であった。

「文学会」は明治二十一年九月から二十四年四月までの間に、少なくとも十九回開かれた。これは坪内逍遙が、文学会は三回ぐらい開かれたであろうと「明治二十三年の文士会」の中で書いていることと、かけはなれた回数であるが、後に示すように実際に開かれていたのである。そこで「文学

会」が当時の文筆家の交流の場として果たした意義は大きかったと思われる。「文学会」の会員の作品が「国民之友」に掲載されることが多かったために、「文学会」は「国民之友」の私設の文筆家集団のようにも見えるが、五十銭の会費を徴収していたことによって、集まる者の自由と、「文学会」の独立が保たれていたように思われる。

「文学会」に参加した七十人の人々が、どのような組み合わせで出席していたかはわからないが、その顔ぶれが文学会の特色を物語っている。参加者は六十歳から十九歳までの老若男子であった。東京出身の人は十二名で蘇峰をはじめとして地方出身者が八十一パーセントを占めている。外遊や留学の経験者は三十二パーセントである。六十パーセントの人が当時の最高の学校教育を受けていた。残りの四十パーセントの人は独自の方法で高い教養を身につけた有識者であった。学歴で人を評価はできないが、文学会に参加した人は、向学心に富み、好奇心が強く、進取の気性に富んでいた人々であったと言えよう。地方から東京へ、東京から海外へと目を向けていた明治の日本に生きていた人々の活力が、ここにも感じられる。「文学会」にはなぜさまざまな職業の人、多様な主張の人が集まったのであるか。それは呼び掛けた蘇峰と、参加する人との求めるものが合致していたからに他ならない。蘇峰は、新旧両文学を愛し、尊重していた。であるから、新旧両文化の相互の影響と橋渡しを、話し合う場となる「文学会」を開催することによって、実現しようとしたのではなからうか。しかし「文学会」は決して蘇峰が一方的に笛や太鼓で呼び集めた会ではなかった。魯庵が「思い出す人々」の中で「蘇峰は作家の意見を尊敬する理解があった」と書いているように、人の意見を尊敬する蘇峰の呼び掛けに、彼等は喜んで参加したのである。彼等は主義主張のちがいにこだわらず、お互いに興味を持ちあうことのできた人々であった。これは明治という若々しい時代に生きた人々のたくましい活力を感じさせる。明治二十一年にこの活力を一堂に集めることができた「文学会」の魅力こそ、「文学会」の第一の意義であろうと思われる。

「文学会」は明治文壇が形成される以前に、硯友社派（「文学会」より三年前に作られたが、大きな文学団体となったのは、「文学会」より後のことである）、早稲田派、根岸派等の中心人物になった人々や、個性の強い露伴や

鷗外などの一匹狼が喜んで出席した集まりである。「文学会」では、政治家であれ、ジャーナリストであれ、宗教家であれ、主義主張を持っている者が文筆家となりえた、柔軟性のある文壇を形作っていたのである。

このような文筆家の集まりである「文学会」が、後にできた文壇よりも内容的にスケールの大きな集まりであったことは注目すべきである。「文学会」は二年半で消えてしまった会であったが、「文学会」での出合いが、後に各方面に枝葉をのばし、それが蘇峰を始めとして、参加者の活躍の場を広げていった。その広がりには、調べれば調べるほど大きなものであることがわかり、「文学会」における人間的な絆の強さが改めて感じられる。

文学会は明治二十三年に最盛期を迎え、二十四年の夏には消えてしまった会であるが、「文学会」の会員が後に「青年文学会」の講演の演者となつて、その文化的活動は引き継がれていったと考えられる。

これまでに「文学会」に関しては、当記念館所蔵の文筆家の書簡を史料として次の三篇を発表した。

一、「明治二十一年に発会した『文学会』について」(『日本史研究』252号 昭和58年)

二、「文学会に参加した人々」表(『徳富蘇峰記念館所蔵 民友社関係資料集』昭和60年 三一書房)

三、『蘇峰とその時代』(昭和63年 中央公論社)

今回は、それに加えて「文学会の開催状況」と、新たに分った人を加えた、「文学会に参加した人々」を表にまとめた。この二つの表が、『徳富蘇峰関係文書』一、二、三巻(山川出版社 昭和五十七、六十、六十二年)と共に、「文学会」の資料となりえれば幸いである。

《第一表》

文学会の開催状況（明治21年9月～24年4月）

明治21年	* 9・8	三縁亭。五時半。出席者は徳富蘇峰・依田学海・矢野龍溪・森田思軒・朝比奈知泉・竹越三又・山田美妙・坪内逍遥・内田周平・高橋五郎・久米幹文。欠席者―菅了法・二葉亭四迷・志賀重昂・中江兆民。（坪内逍遥の「逍遥日記」、山田美妙の「明治文壇叢話」、蘇峰宛出席者の書簡による。）	* 印は確実に開かれた月
明治21年	* 10・13	玉川堂（神田今小路狸橋通、朝比奈知泉・依田学海の書簡による。「会するものは、森田・徳富・内田・志賀の数人に過ぎず。されども秀才ある人々なれば、その談、皆新奇にして興に入ぬ」（『学海日録』による。）	
明治21年	* 11・10	萬代軒。五時半（依田学海の書簡による）。 依田学海・菅了法・矢野龍溪・森田思軒・朝比奈知泉・徳富猪一郎・山田武太郎の七人（『学海日録』による）。	
明治21年	* 12・8	萬代軒（朝比奈知泉の書簡（21・11・17）によると、会則ができた）。 依田学海「日本の詩文は漢土の詩文に非ず」を口演（『学海日録』による）。	
明治22年	1・14	萬代軒。五時。酒井雄三郎の送別会があった。出席者は、依田百川・森田文蔵・坪内雄蔵・宇川盛三郎・高橋五郎・伊勢時雄・小崎弘道・内田周平・石橋忍月・徳富その他三、四名（酒井雄三郎の日記による）。出席者全員が文学会の会員であるので、文学会と推定。	
明治22年	* 1・26	「文学会は午後五時に開き、神田三河町にあり。民友社の一員あるのみ。いかにしけん、諸子一人も出来らず。已を得ず、八時に至り洋食を喫してかへりぬ」（『学海日録』による。連絡の不行き届きであったのか）。	
明治23年	* 1・11	萬代軒。依田百川・坪内逍遥・徳富猪一郎・森田文蔵・内田周平・	
明治23年	* 6・8	萬代軒。「矢野・徳富・山田・饗庭・坪内等の人々及び徳富の弟某も同じく会せられき。年廿一、二の少年なりき」（『学海日録』による。「富士」による五月四日の「文学会」は、六月八日と同じ会であったと考えられる）。	
明治23年	* 7・13	萬代軒。依田学海・朝比奈知泉・森鷗外の三人（『学海日録』による。矢野龍溪書簡によると蘇峰病氣）。	
明治23年	* 8	不明	
明治23年	* 9・14	休会（森田思軒書簡による）。	
明治23年	* 10	不明	
明治23年	* 11・16	萬代軒。出席者は坪内逍遥・饗庭篁村・須藤南翠・依田百川・森田思軒・山田美妙・中江篤介・高橋五郎・落合直文・市村瓊次郎・井上通泰・矢崎嵯峨の屋・尾崎紅葉・広津柳浪・川上眉山・石橋思案・石橋忍月・丸山正彦・中井喜太郎・巖本善治・泰政次郎・原抱一庵・森貞次郎・飯野忠一・徳富蘇峰・朝比奈知泉・野口寧斎・人見一太郎・宮崎宣政・中村修一・徳富蘆花・福田和五郎（白石実三「根岸派の人々」に収録の、民友社からの森田思軒宛ての報告書による）。	
明治23年	* 12・14	「徳富・朝比奈の両氏が此会の拡張を謀るよしにて廻状をもて諸名士をよせられしかば、その人三十余人に及びき」（『学海日録』による）。 萬代軒。五時半。前述の出席者に加え、菅了法・森鷗外（欠席）・織田純一郎・大槻修二・大西祝・高橋太華・小中村義象・巖谷小波・渡辺乙羽（同右の資料による）。	
明治23年	* 12・14	堀・宮崎湖処子（朝比奈知泉の書簡による）。	
明治23年	* 1・11	中根香亭（『学海日録』による。三十一人会す）。	
明治23年	* 1・11	萬代軒。依田百川・坪内逍遥・徳富猪一郎・森田文蔵・内田周平・	
明治23年	* 3・9	休会（森田思軒の書簡（22・3）による）。	
明治23年	* 4・13	休会（人見一太郎の書簡による）。	
明治23年	* 4・4	萬代軒。主な出席者は徳富蘇峰・矢野龍溪・坪内逍遥・山田美妙・依田学海・饗庭篁村・朝比奈碌堂・徳富蘆花・中村修一（徳富蘆花の「富士」三巻七章からの推定）。	
明治23年	* 5・4	不明	

尾崎行雄ら諸氏三十余名〔朝野新聞〕(23・1・13)による。
尾崎行雄の口演あり〔国民新聞〕12号による。

幸田露伴・須藤南翠・石橋忍月・内田魯庵・中西梅花・宮崎湖処子・淡島寒月・井上通泰・尾崎紅葉。尾崎紅葉の「漢字を廃して仮名ばかりにすべし」の口演あり(坪内逍遙の「明治廿三年の文士会」による)。

2・8

石橋忍月の書簡(23・2・13)より推定。

*3・8

萬代軒。野口寧斎・雲峰子・佐藤六石〔逍遙日記〕による。

4

「二十余人会せらる」(『学海日録』による)。

5

不明。

6

不明。

*6・14

萬代軒。六時半。矢野文雄が「浮城物語」組立の次第を口演。

7

〔国民新聞〕134号の広告による。

8

不明。

*8・9

幸田露伴・饗庭篁村・大久保・野口一太郎・矢野文雄・宮崎湖処子・福田和五郎・末広鉄腸の葉書による。

9

「森槐南、漢・魏以来の古詩の来歴及び意想を説く」(『学海日録』による)。

10

萬代軒。午後七時。末松謙澄・国分青屋・森田思軒・幸田露伴・矢野龍溪・森槐南他二十八名。学海居士、大に末松謙澄と舌戦す。

11

〔今年の文学界〕乾坤一布衣、〔国民新聞〕227・229号による。

12

依田学海の「源氏物語の話」の口演あり〔国民新聞〕227号による。

13

「源氏の文法といふ題にて源氏物語の大体を論ず」(『学海日録』による)。

14

矢野龍溪・尾崎行雄書簡による。

15

〔落合直文、文法を講ず〕(『学海日録』による)。

16

矢野龍溪書簡(23・11・4)による。

17

「文学会に淡路町に赴く。萬代軒は閉店せしをもて宝亭に代ゆ」(『学海日録』による)。

18

不明。

明治24年

1

三河屋。朝比奈知泉書簡(23・12・26)から推定。

*2・14

三河屋。依田学海・矢野文雄・徳富猪一郎・森田思軒等。

*3・14

(『学海日録』による)。

*4・11

三河屋。六時。森槐南の「支那戯曲一班」、饗庭篁村の「浄瑠璃に就いての話」あり〔国民新聞〕の広告による。大西祝の葉書による。「会するもの甚だ多し」(『学海日録』による)。

*5・11

志賀重昂の書簡によると、志賀の友人二、三人出席したい旨。

*6・11

三河屋。六時。饗庭篁村の「曲亭馬琴の性行」あり〔国民新聞〕の広告による。小中村義象の葉書による。

*7・11

不明。

*8・11

不明。

*9・11

不明。

*10・11

不明。

*11・11

不明。

*12・11

不明。

*13・11

不明。

*14・11

不明。

*15・11

不明。

*16・11

不明。

*17・11

不明。

*18・11

不明。

《第二表》

文学会に参加した人々

注 イ 明治20年当時の歳
 口 「国民之友」の特別寄書家
 ハ 「国民之友」への寄書のある人は○印
 ニ 当館所蔵の書簡数
 ホ 平成三年に展示してある書簡は○印

氏名	号	出身地	イ	生没年	口	ハ	備考	ニ	ホ
久米 幹文		茨城	60	1828—1894			東京大学講師	—	
依田 百川	学海	東京	55	1833—1909		○	漢学者、随筆家、劇作家。歌舞伎劇の改良と向上を説いた。	14	○
中根 淑	香亭	東京	49	1839—1913			国学者、沼津兵学校の教授。「日本文典」の著者。	—	
中江 篤介	兆民	高知	41	1847—1901	特	○	自由民権思想家。フランスに留学。仏学塾を開く。「東洋自由新聞」「東雲新聞」主筆。「三酔人経綸問答」。	27	○
大槻 修二	如電	東京	43	1845—1931			僧籍に入る。博学強記は有名。	11	○
大槻 文彦	復軒	東京	41	1847—1928			国語学者、東京大学南校卒。「言海」を出版。	3	○
末広 重恭	鉄腸	愛媛	39	1849—1896	特	○	新聞記者、小説家、政治家。「朝野新聞」で活躍、筆禍をうける。政治小説「雪中梅」で大衆の人気を得る。明治19年欧米外遊。	10	○
矢野 文雄	龍溪	大分	38	1850—1931	特	○	政治家、小説家、「報知新聞」主筆。慶応卒。大隈とともに改進黨結成。政治小説「経国美談」の印税で17年外遊、19年帰国。新聞に小説を最初に掲載、大衆化をはかる。	81	○
湯浅 治郎		群馬	38	1850—1932			民友社の創立協力者。キリスト教社会運動家。同志社英語学校卒。蘇峰の義兄。	7	○
織田純一郎		京都	37	1851—1919			翻訳家、評論家。7年三条公恭と渡英、10年帰国。	—	
内田 周平	遠湖	静岡	34	1854—1944		○	儒学者。	5	○
末松 謙澄	青萍	福岡	33	1855—1920		○	評論家、翻訳家、政治家。師範学校中退。ケンブリッジ大学で文学・法学を修め、滞英中「源氏物語」を英訳、19年帰国。伊藤博文の女婿。	24	○
饗庭与三郎	篁村	東京	33	1855—1922		○	貸本屋で和漢の書に親しむ。説売新聞社に入社。戯作者として活躍。須藤南翠とともに文壇の二長老におされる。小説家、評論家。「むら竹」	4	○
高橋 五郎		新潟	32	1856—1935	特	○	評論家、語学者、翻訳家。縮方塾で洋学を学ぶ。「六合雑誌」の寄書家でもあった。	1	
小崎 弘道		熊本	32	1856—1939	特	○	キリスト教の指導者。同志社英語学校卒、同志社総長。東京に靈南坂教会を設立。	9	○
須藤 光暉	南翠	愛媛	31	1857—1920		○	小説家、新聞記者。松山師範卒。「新小説」の編集。	1	
横井 時雄		(伊勢)	31	1857—1928	特	○	キリスト教の指導者、小楠の子。アメリカ留学、同志社英語学校卒。同志社総長、のち政界に入る。	34	○
菅 了法	桐南	鳥根	31	1857—1936	特	○	評論家、僧侶。慶応義塾、オックスフォードに学ぶ。「政論」の記者。筆禍をうける。	5	○
国分 高胤	青崖	仙台	31	1857—1944		○	漢詩人。「日本」の評林欄を担当、漢詩で時事を風刺。	—	
尾崎 行雄	粵堂	神奈川	30	1858—1954	特	○	政党政治家。慶応義塾中退、欧米視察。護憲運動の先頭にたち「憲政の神様」といわれた東京市長。	34	○
淡島宝受朗	寒月	東京	29	1859—1926			小説家、随筆家、俳人。椿岳の子。西鶴再評価	1	○

氏名	号	出身地	イ	生没年	口	ハ	備考	二	ホ
坪内 雄蔵	逍 遥	愛 知	29	1859—1935			の契機をつくった。 ○ 小説家、劇作家、評論家。「早稲田文学」創刊。東大政治経済科卒、東京専門学校講師。森鷗外と「没理想論争」をたたかわす。「小説神髓」「当世書生気質」。シエークスピアの研究。	18	○
酒井雄三郎	茫茫学人	熊 本	28	1860—1900	特		○ 政治、社会評論家。仏学塾に入り中江兆民に学ぶ。フランス留学、日本に最初にメーデーのことを報道する。フランスで客死。	33	○
落合 直文		宮 城	27	1861—1903			○ 歌人、国文学者、東大古典講習科卒。「日本文学全書」刊行。韻文改良運動を進めた。「新声社」を結ぶ。	—	
広津 直人	柳 浪	長 崎	27	1861—1928			○ 小説家、帝大医科大学予備門中退。硯友社同人。	—	
森田 文蔵	思 軒	岡 山	27	1861—1897	特		○ 翻訳家、ジャーナリスト、文学者。慶応義塾卒、報知新聞社に入る。欧州歴訪。訳書「十五少年」「探偵ユーベル」。	90	○
矢部 新作		栃 木	27	1861—1893			早稲田専門学校卒、「朝野新聞」で筆禍にあう。渡米。毎日新聞記者。	1	
森林 太郎	鷗 外	島 根	26	1862—1922			○ 小説家、戯曲家、評論家、翻訳家。東大医学部卒。軍医。ドイツ留学。「舞姫」を「国民之友」に掲載。「しがらみ草紙」創刊。「新声社」を結成。訳詩集「於母影」を「国民之友」に掲載。	2	○
朝比奈知泉	碌 堂	茨 城	26	1862—1939			○ 新聞記者、「東京日々新聞」主筆。東大中退、外遊。蘇峰、陸羯南とともに新聞界の三豪と称せられた。	50	○
森 泰二郎	槐 南	名古屋	25	1863—1911			○ 漢詩人、東京帝大文科大学講師。	—	
志賀 重昂	矧 川	愛 知	25	1863—1927	特		○ 地理学者、評論家。札幌農学校卒。19年南洋諸島を旅。政教社を設立、「日本人」創刊。世界漫遊「日本風景論」。	58	○
巖本 善治	撫象子	兵 庫	25	1863—1942			キリスト教女子教育者。明治女学校の校長、「女学雑誌」主筆。	—	
矢崎鎮四郎	嚙蛾の屋おむろ	東 京	25	1863—1947			○ 小説家、詩人。旧東京外語露語科卒(給費生)。	5	○
徳富猪一郎	蘇 峰	熊 本	25	1863—1957			○ 新聞記者、歴史家。「国民之友」「国民新聞」創刊。同志社英語学校中退、欧米視察。「近世日本国民史」百巻。	500	○
高橋 七郎	太 華	福 島	25	1863—?			○ 児童文学者、小説家、重野安禪に学ぶ。	—	
大西 祝	操 山	岡 山	24	1864—1900			○ 哲学者。同志社、東大哲学科卒。24年東京専門学校の講師、逍遙とともに早稲田文科の素地をつくった。31年ヨーロッパに留学。	25	○
長谷川辰之助	二葉亭四迷	東 京	24	1864—1909			○ 小説家。東京外語露語科中退。41年朝日新聞特派員として訪露。「国民之友」に「あひびき」訳載、「浮雲」を連載。	1	○
宮崎八百吉	湖処子	福 岡	24	1864—1922			○ 詩人、小説家、評論家、牧師。東京専門学校政治科、英語科兼修。民友社社員。	5	○
市村瓊次郎	器 堂	茨 城	24	1864—1947			○ 中国史学者。東大古典講習科卒、「新声社」に参加。	4	○
小中村義象		熊 本	24	1864—1923			国文学者、東大卒。31年パリに留学。小中村清矩の養子。	3	○
中井喜太郎	錦 城	山 口	24	1864—1924			○ 新聞人。東京大学中退、読売新聞社に入る。博覧強記。	—	
石橋 友吉	忍 月	福 岡	23	1865—1926			○ 文芸評論家、小説家。東京大学法科卒、弁護士。	18	○
竹越与三郎	三 叉	埼 玉	23	1865—1950	特		○ 歴史家、政治家。慶応義塾卒。初期民友社社員。	45	○

氏名	号	出身地	イ	生没年	口	ハ	備考	ニ	ホ
原 余三郎	抱一庵	福 島	22	1866—1904		○	『二千五百年史』 小説家、翻訳家。札幌農学校卒。	—	
井上 通泰	南天荘	兵 庫	22	1866—1941		○	歌人、国文学者、医師。東大医科卒。「新声社」を結ぶ。常盤会を興す。	24	○
中西 幹男	梅 花	東 京	22	1866—1898		○	詩人、小説家。「新梅花詩集」。	11	○
尾崎徳太郎	紅 葉	東 京	21	1867—1903		○	小説家。山田美妙らと「硯友社」を結成。「我楽多文庫」を創刊。東大中退。「金色夜叉」。	1	○
斎藤 賢	緑 雨	三 重	21	1867—1904		○	小説家、評論家。明治法律学校中退。	—	
野口一太郎	寧 斎	長 崎	21	1867—1905		○	漢詩人。漢学者 野口松陽の子。	6	○
石橋助三郎	思 案	神奈川	21	1867—1927		○	小説家、東大法科、文科に学ぶ。「硯友社」を興す。	—	
幸田 成行	露 伴	東 京	21	1867—1947		○	小説家、随筆家、考証家。東京英語学校中退、「一口剣」を「国民之友」に掲載。尾崎紅葉と並ぶ小説家として広く知られた。	10	○
人見一太郎	呑 牛	熊 本	21	1867—1924			民友社創立当初からの社員。	62	○
山田武太郎	美 妙	東 京	20	1868—1910		○	小説家、詩人、評論家。言文一致の新進作家。紅葉と「硯友社」を起し、「我楽多文庫」創刊。大学予備門中退、「蝴蝶」を「国民之友」に掲載。	42	○
徳富健次郎	蘆 花	熊 本	20	1868—1927		○	小説家。民友社社員。同志社英語学校中退。世界漫遊。「不如帰」を「国民新聞」に掲載。	10	○
内田 貢	魯 庵	東 京	20	1868—1929		○	評論家、翻訳家、随筆家。東京専門学校中退、初期国民新聞社社員。「硯友社」を批判。「文学者となる法」。丸善の書籍部門顧問。	6	○
宮崎 宣政	晴 瀾	高 知	20	1868—1944		○	「経世新報」の記者、「自由新聞」の主筆。詩人。	1	
川上 亮	眉 山	大 阪	19	1869—1908		○	小説家。東大文科中退、硯友社同人。	—	
渡辺 乙羽	(大橋)	山 形	19	1869—1901			小説家。思案を介して「硯友社」に入る。博文館の女婿。支配人となり書肆と文学者との連鎖となった。	1	○
巖谷 季雄	小 波	東 京	18	1870—1933		○	児童文学者、小説家、俳人。「硯友社」同人。	16	○
福田和五郎			18	1870—1927			英語学校卒。国民新聞社編集長。後「二六新報」に転じた。	7	

雲峰子 磯貝 (生没年不詳「逍遙日記」、磯貝由太? 345号に寄稿あり)、佐藤六石 (麴亭主人、「逍遙日記」による)、堀 (知泉書簡(22.12.14)による)、中村修一(国民新聞社社員)、大久保連・丸山正彦(東大卒)、泰政次郎・森貞次郎・飯野忠一・宇川盛三郎(6,91,155,156,267号の「国民之友」に寄稿あり) 以上70名

平成3年1月 学芸員 高野静子 作成

(尚、平成2年11月より『学海日録』(全11巻・別巻1)が岩波書店から出版されはじめた。依田学海は「文学会」の重鎮的存在であったので、彼の日記から、「文学会」についての新たな事実が多くわかることを期待している。)

平成三年度 出展書簡

(文学会関係書簡は上の表に掲載)

会津八蔵	大隈重信	九条武子	下田歌子	内藤湖南	村山龍平
青木周蔵	大谷光瑞	国木田独歩	杉浦重剛	中村不折	矢島樞子
朝河貫一	大山巖	国木田信子	相馬黒光	新島襄	山県有朋
阿部充一家	岡倉天心	久保田米僊	田口卯吉	新渡戸稻造	山路愛山
池辺三山	勝海舟	西園寺公望	田中正造	橋本雅邦	山室軍平
伊藤博文	桂太郎	斎藤茂吉	高島北海	服部宇之吉	安田靉彦
井上馨	加藤高明	佐々木信綱	高田早苗	原三溪	柳田国男
植木枝盛	川上操六	佐々城豊寿	高浜虚子	原田直次郎	楊浅守
浮田和民	神田喜一郎	洪沢栄一	寺内正毅	平福百穂	楊井小楠
内村鑑三	清浦奎吾	島木赤彦	徳富一敬	深井英五	横井小楠
		島崎藤村	徳富久子	福沢桃介	与謝野晶子
		島田翰	徳富静子	牧野伸顕	与謝野鉄幹
		島田三郎	徳富愛子	益田孝	

(目録8に於て、大谷光瑞・橋瑞超の瑞の字が端と誤植されていたことを訂正いたします)